

「ベルンライター文書」に見た 第一次世界大戦中の 「中欧」経済同盟計画（下）

三 宅 正 樹

〔史料1〕 ベルンライターから侯爵ズデンコ・ロブコヴィッツ
宛の 1915 年 5 月 10 日付けの手紙⁽⁹⁴⁾

（ベルンライターの 1915 年 5 月 10 日付けの前書き）⁽⁹⁵⁾

しばらく前に、私は著者名のない、草稿として印刷された小冊子『オーストリア・ハンガリーの運命の時』を受け取った。それから間もなく、僧院長ヘルマが私のもとを訪れ、著者はビリン在住の侯爵ズデンコ・ロブコヴィッツ⁽⁹⁶⁾である、と語った。そこで私は、侯爵ロブコヴィッツに手紙を出した。その手紙のなかで、私は、送付されたことへの謝辞を述べ、この小冊子自体について若干の好意的な言葉をつけ加えた。これに対して、ロブコヴィッツは、ここに挿入した手紙によって答えた。これに対し、私は、ふたたび極めて詳細に答えた。というのは、この小冊子は、いくつかの点で興味深いからである。それが、直接に侯爵の筆によるものではないとしても、その中には、彼の考えが含まれており、従って、高度に保守的な層の考えに近い。この層は、オーストリアの中で、あれほどしばしば決定的に作用したか、少なくとも強力な影響を及ぼした。この面では、この書物は、むしろひとつの進歩で

ある。それは、ハンガリーの国家としての性格を承認しており、ドイツとの緊密な同盟に賛成している。それ故に、私は、上に引用した侯爵の手紙に詳しく答えたのである。私が最近、この小冊子のことを話すと、それを非常に読みたがっていたように見えたヴェケルレにも、私は今日、一冊を送り、それに加えて、ロブコヴィッツ宛の手紙と同じように、ここに写しの形で続く一通の手紙を書いた。

ロブコヴィッツ宛の手紙

(ウィーン) 4区, ブラームスプラッツ 6番

ウィーン, 1915年5月10日

私が殿下の興味深いお便りに、今日になって初めてお答えし、小冊子のご送付に今日になって初めてお礼を申し上げる理由は、私が、私に対してご親切に与えられた、小冊子の内容について何か申し上げる、というお許しを活用しようと望んだこと以外のものではございません。

前もって私は、殿下のお便りで表明されている見解に同意申し上げるということ、特に述べておきたいと存じます。その見解とは、我々が平和の到来に準備無しで立ち向かう事態が生じないように、実りある政治的な準備の仕事をするための時間を空費することは我々には許されない、というものです。人々のあらゆる層の中に、我々は、戦後になって、二度と再び以前の状態に逆戻りすることは許されない、という願望と期待がみなぎっています。なぜなら、そうでなければ、財と血が無駄に犠牲にされたことになるからです。我々は、新しい、内的により偉大なオーストリアを作るために努めなければなりません。このことを、しかしながら我々は、これまでの諸政党の標語によっては達成出来ないでしょう。そうではなしに、殿下が正しく述べて居られるように、それに向かって我々全てが手をさしのべるべき真の創造によってのみ、達成出来るのであります。こうして、遂に意志は行為となるの

であります。

私は、以下のことを率直に告白致しますし、殿下はそれを当然のことと思われるでまいしょう。それは、私が、この小冊子の詳細の全てにわたって直ちに同意するものではない、ということであります。しかし、主要な点で、私は、ここに論じられている視点を正しいと考えます。二三の視点は、まさしく素晴らしいものであり、反論の余地なく論証されています。私もまた、我々が、国家全体について、今のものとは異なる、別の構築を実現するであろう、と考えてきた人々のひとりであります。けれども、ハンガリーがそれをもって王国 [Monarchie オーストリア・ハンガリー二重王国をさす。以下同じ] の事柄に対して尽くしてきた力、犠牲的行為、忠誠に関して、事態がこのように進展してきたので、我々は、二元主義 (Dualismus) を、決定的な出発点として、その実現に努めるべきであります。この小冊子は、それ故に、極めて正当にも、我々がこの考えの枠の中で、我々のハンガリーとの関係の安定化を達成すべく努力すべきである、と述べています。ハンガリー人は、これまでいつも、そしてまさしくオーストリアの保守的な層に関して、二元主義を最終的には承認せず、ほかの構造によって置き換える機会を待っているだけだ、という恐れを抱いてきました。ハンガリー人が、人々は彼らの国家としての性格を、ハンガリー内部の諸民族を口実に利用して疑問視するつもりはない、という事実に関して安心を得るならば、彼らは、彼らの不信感を捨て去り (原文は ablegen)、帝国 (Reich) に属する物は、今よりもより進んで帝国に委ね、結局のところ、彼らのかかえる諸民族に対しても、少なくとも彼らの権利は認めるであろう、ということを、私は期待しています。そして、これらの権利を、これらの諸民族に、1867年に、デアーク (Deák-Eötvös) は既に承認したのであります。目下のところ、ハンガリーで統治し、我がオーストリア政府の弱腰とは逆に、いろいろな斟酌を一切しない強力な人物によって、我々の方がひどく後手に回っています⁽⁹⁷⁾。戦後に

は、均衡がふたたび確立されなければなりません。このことは、二元主義の徹底的に忠実な解釈の基盤の上にのみ、オーストリアとハンガリーのあいだの、あの信頼が確立されうる、という理由からだけで、必要なことであります。その信頼を、我々は、我々が、王国の強力な地位と、防衛力と、通商上の威信に関して協力することが出来るために、必要としているのであります。

殿下は、私が、この小冊子のドイツ帝国に対する我々の関係に関する詳論について、とりわけ同感であると述べることを理解出来ると考えられるであります。この小冊子で詳細に論じられた二つの点について、私は、それらが誤った作り話を吹き飛ばすものであるが故に、よろこんであります。オーストリア・ハンガリーのドイツとの結合 (Zusammenschluß) を我々の祖国の独立にとっての 危険と見なすのは、ひどい短見というものであります。まさしくその逆が正しいのです。我々が 孤立していれば、我々は弱体となり、我々が弱体となるならば、我々は直ちに、強力の保護を受ける立場に落ち込んでしまいます。しかし、ドイツもまた、オーストリアが強力となることによって、利益のみを得るのであります。このことを、私はドイツで、しばしば耳にしましたし、このことがドイツの利益に即するが故に、私は、このことが正しいと考えます。我々が、両国ともに強力になることが出来るのは、我々がお互いに政治的、軍事的、経済的に依存しあう時だけです。それ故に、現下の状態は、我々の将来の唯一の正しい基礎なのです。プロテスタントの国家としてのドイツ国家は、宗教的観点から見て、我々にとって、何等の危険をも意味しません。その理由は簡単です。ドイツは、悲観論者が信じ込ませようとしているほど、プロテスタントだけの国家ではもはやなくなっているからです。ドイツでは、ある程度の均衡が成立しています。このことは、ヴィルヘルム皇帝陛下の高貴な理念でありましたし、この戦争によって、この均衡は、はかりしれぬ程促進されることでしょう。

行政の地方分権化の必要についての、この小冊子の論述には、私は、留保

を付けずに賛成することは出来ません。この地方分権化という言葉のもとで何を考えるかが、まさしく重要なことであります。沢山の、細かくて意味のない仕事によって、わが国の中央官庁は苦しめられています。そして、これらの仕事は、事務過程を不活発にし、費用のかさむものになっています。オーストリアのさまざまな州が、経済的にも社会的にも、極めて多様な性格をもっていること、そして、オーストリアでは、他のどこよりも画一的な統治が困難であることは、私も認めます。しかし、この小冊子のなかで、当然のことながら、高く掲げられている、まさにその、オーストリアの国家理念が、諸力の結集を可能にします。そして、偉大な国家の諸力は、今日では、偉大にして貫徹する国家制度によってのみ、真価を発揮することが可能になります。交通制度、法生活の基礎、社会的立法、ならびにその他の多くの事柄は、おそらく統一的に組織された状態が保たれていなければならないでしょう。なぜならば、あまりにも拡大された地方自治は、国家の正義感、経済的競争力、社会的目的と矛盾を来すであろうような不平等を創り出すであろうからであります。我々が、地方自治の、中央権力との境界線を必要としており、現在の中央集権は全く時代遅れになっていること、そして、多くの事項が州に委任されなければならないということは、私も認めるにやぶさかではありません。ただしそれは、国家の権威も強化され、国家の行政が議会の影響から解放され、それによって、我々全てが渴望していること、すなわち我々の支離滅裂な状況のなかにもたらされる秩序と、各州の要求の偉大な国家目的への従属化とを、我々が達成した場合に限られます。

戦後、複数制あるいは他の方法による普通平等選挙権の制限が可能となるかどうかについては、私は疑念をさしはさみたいと思います。あの当時、普通平等選挙権を要求して戦った我々は皆、普通平等選挙権は、失敗したとしても取り消しのきかない実験なのだということを示唆したのですが、残念ながら、この示唆は効力を発揮しませんでした。ですから、私には今日でも、

現在戦争で血を流した、国民のあの幅広い層に対して、彼らが復員して来た時に、彼らの政治的権利を、何らかの形で制限することが出来るとは考えられません。いずれにしても、このような制限として、彼らは複数制を受けとめるでありましょう。しかし、絶対に必要なことは、下院議員の数を削減することです。現在のような数の多い形での下院と、特に巨大な委員会は、迅速な議事の処理にとって、ほとんど克服し難い障害であることが証明されています。さらに、議事日程の導入は、まさしく自明の事柄であります。これについては、何年も話題となってきました。その必要性は全ての人が認めており、今や現実化もなされなければなりません。

私は、これ以上の個々の点に立ち入るつもりはありません。この小冊子の大きな意義は、私の見解によれば、次の事柄のなかにあります。それは、この小冊子が、我々の将来の生存にとっての重要な根本問題の取り扱いと解決の、この小冊子に示された方式によって、政治にかかわる、そしてこれまで親しく接触することのなかった、諸氏の間に、ひとつの結びつきをもたらすのに適している、ということと、この小冊子が、このことによって、殿下がこ意味で現実に関与することを決意されるであろうような、「強力な、その任務を自覚した国内の政党組織の形成」が実現されるのに貢献するであろうということに存しています。このことに協力するであろう人々のなかに、私も入れていただくこととなるでしょう。

この小冊子を、私はこれまでにエルヴァイン・ノスチッツ伯爵⁽⁹⁸⁾にさしあげ、さらに前ハンガリー首相ヴェケルレ⁽⁹⁹⁾と、ウルバン下院議員⁽¹⁰⁰⁾にさしあげました。私の手に委ねられた、それ以外の巻については、偉大な目標について真剣に考えている人々の手に渡るように、慎重に配慮する所存です。

敬 具

〔史料2〕 ベルンライターのアレクサンダー・ヴェケルレ宛の
1915年5月10日付けの手紙⁽¹⁰¹⁾

本日に至って初めて、私は、閣下が表明された希望にお応え出来ることになり、それについて最近お話をした小冊子をお送り申し上げる次第です。といいますのも、私はそれを落掌したところだからです。それは、ロブコヴィッツ侯爵自身の筆によるものではないとしても、彼の示唆に基いて作成されたものであり、彼の考えを含んでいます。それは、この問題に関心を持つ人々に、実りのある政治的な準備の基礎を提示することを目的としています。この小冊子は、原稿扱いで印刷され、さしあたり公開で論評されることを予定したものではありませんが、政治上の友人たちに配布するのは、全くさしつかえないでしょう。私は、本当に限られた部数しか持っておりませんので、ステレーニ閣下⁽¹⁰²⁾にもこの小冊子をお見せいただけるよう、お願い申し上げます。小冊子の内容については、詳しくは立ち入るつもりはございません。といいますのも、閣下は、実質的な著者を顧慮すれば重要で特徴的な議論、直ちに見いだされるであろうからです。当然のことながら、私は、この小冊子に対して、全ての論点で賛成する訳ではありませんが、そこで述べられている多くの事柄を、きわめて的確であると考えます。特に、三十二頁から後の、ハンガリーについての詳論にご注意いただきたい。高度に保守的なサークルから、ハンガリーが国家であることについての完全な承認についてのこれほど無条件な賛成の発言が発せられ、二元主義の破棄という意味での大オーストリアについての一切の幻想が葬られたと宣言されたのは、私の知る限り初めてのことです。以下のことは私の期待であり、閣下は、この期待が誤ったものであるかどうかを判断する、ハンガリーのなかで最適の人物であられます。その期待とは、ハンガリーがひとたび、ハンガリーがオーストリアの

特定の人々に対して未だに抱き続けている不信感を投げ捨てるならば、ハンガリーは、オーストリアとハンガリーの両国の協力についての若干の規定を、この協力がますます信頼に満ち、忠実で、偏見のない、相互の利益に即したものになる、という意味で改訂することに賛成するのではないか、というものです。改訂の目的は、両国の統一された力が、外部に向かってより強く作用し、我々の相互の任務の遂行がより容易になることにあります。以上のことと同じように、この小冊子のなかで特徴的なのは、ドイツへの密接な経済的連結の必要性についての、断固とした確信であります。閣下におかれては、ここから、以下のことを看取していただきたいものであります。それはすなわち、この結合の思想を抱いているのは、今オーストリアでさかんに発言しているあの経済界の人々だけではなく、宣伝めいた営みとは全く遠いところにいる人々も、同じ意見を持ち、この意見をもし可能な場合には、より一層無条件に主張している、ということであります。私は、思い違いでなしに、ドイツへの経済的連結の思想は、我々のもとでは、真剣に考える人々の間で大きな前進を遂げた、と断言出来ます。これらの人々は、しかしながら、目立った動きはしていません。それは、彼らが、現状は十分に明確にされてはいない、と考えており、ドイツでの慎重さに直面して、このような態度を取らなければならない、と考えているからです。しかし、このことは、ドイツと経済的に可能なかぎり広い範囲にわたって協調しなければならない、というこの願望をいささかも傷つけるものではありません。

この経済上の政策を唯一の正しいものと見なしている我が国の実業家のサークルは、彼らが、オーストリアやハンガリーの産業をドイツに引き渡してしまおうとするものは誰もいないし、我々は相互の促進の形態を追求して、共通に締結すべき経済政策ならびに共通に締結すべき通商条約を追求し、そのための国際法的な基礎に依存する機構を見いだそうとしているのだ、ということ洞察するにつれて拡大しつつあります。そのためには我々は、何より

「ベルンライター文書」に見た第一次世界大戦中の「中欧」経済同盟計画（下）

も信頼を、しかもドイツと王国との間の信頼だけでなく、とりわけオーストリアとハンガリーの間の信頼を必要としています⁽¹⁰³⁾。我々は、これらの困難で微妙な問題を公開の席で議論する必要はありません。それだけ益々、お互いの利害について明確な認識を得るために、これらの問題を時機を失わないうちに小さなサークルのなかで議論しておくことが必要になります。オーストリアとハンガリーの間では、手練手管をいくらか減らし、もっと率直であることを、私は希望するでしょう。なぜならば、お互いの手のなかにあるカードを、我々はお互いに十分知っているからです。この小冊子に、それが必要とされる信頼を強化するのに適しているが故に、私は若干の意義を付与するのであります。

敬 具

〔史料 3〕 ベルンライターのマクシミリアン・エゴン・ツー・フルステンベルク宛の 1915 年 11 月 20 日の手紙⁽¹⁰⁴⁾

ウィーン、1915 年 11 月 20 日

親愛なる友よ：

私の一般的な印象は、一連の重要な問題が未解決のままになっていて、それらの問題について我々の見解が全くまちまちである、というものです。バルプラッツの男は、何キロメートルにも及ぶといえるような長たらしい演説をしますが、そこからは何もでてきません。最近の訪問に際しては、彼は、今までよりはましな印象を作り出したということで、積極的な提案もしたということです⁽¹⁰⁵⁾。軍事的には、諸力の可能な限りの集中が望まれています。その理由は、我々が、少なくとも当面はイタリアでの攻勢という考えを捨てているからであり、また、セルビア問題も、この国家が完全に打倒された時に、可能な限り迅速に解決されなければならないからです。アルバニアを独立させるという実験の再現については、ベルリンの人々は、全く断固として、

関知しようとしません。それと逆に、当地では、この考えにまだ執着しています。この考えに執着するか否かによって、西バルカンの将来の構成が変わるのは言うまでもないことです。ベルリンでは、北アルバニアをセルビアに与えることを恐れてはいません。なぜならば、このことにより、セルビアが強化されるよりも弱体化されると見られているからです。さらに、こう考えられています。すなわち、セルビアがブルガリアにマケドニアとネゴチン周辺を、そしてオーストリア・ハンガリーに場合によってはドナウ右岸を割譲しなければならなくなり、新しい清潔な王朝が導入されるならば、経済的な平和の状態の基礎となることが出来るバルカンの最終的分割の思想がこれによって実現されるものと考えられています。南アルバニアは、その際にはギリシャに帰属するでしょうし、アドリア海のジブラルタルとしてのヴァローナは我国に帰属するでしょう⁽¹⁰⁶⁾。その時には、それ以上の思想が実現されることにもなるでしょう。それはすなわち、バルカン諸国は、国家としては独立を保つけれども、中心の両強国への経済上、財政上、交通政策上の連結のもとに、明示的に操作されてはいないけれども、事実上の政治的同盟へと結合される、というものであります。この諸国家の複合体は、中心の両強国からコンスタンチノーブルへの、そして両海峡を経て小アジアとさらにそれ以外のオリエントに至る、偉大な橋となるであります。これは、君も知っているように、私の昔からの考えです。セルビアが完全に打倒され、盗賊の巢窟が完全に一掃されるならば、セルビアは、たとえ我が王国に直接結合することはないにしても、中心の両強国の、より高度の政治的、経済的な統一体に、進んで加入するでしょう。残念ながら当地では人々は、見たところこの理念から遠く隔たっています。なぜならば、人々はそもそも、バルカン政策のより偉大な構想に対して心を閉ざしていて、この事柄から何事も学ばず、何事も忘れていないからです⁽¹⁰⁷⁾。

しかし関心の中心にいちしているのはポーランド問題です。至るところで

私は non liquet（良くわからない）という態度に出会っているのですが、それが最も甚だしいのは君のブルシェンシャフト時代の仲間（ドイツ外相ヤーゴーをさす）⁽¹⁰⁸⁾です。彼は、私とのこの問題についての長い対話の後で、最後に「全ての」解決は、我々にとってどれもみな具合のわるいものばかりだ、と言いました。ベルリンでは、ポーランド人と彼らの統治能力に対する強い不信感が支配的です。彼らは次のように考えています。絶対的に、東部国境のロシアに対する防御は確立されなければならないし、経済的にも、ドイツは、そこにドイツが毎年4億マルクを輸出しているロシアとポーランドの市場（オーストリア・ハンガリーは約3千5百万クローネにとどまっています）を放棄することは出来ない。また同様にドイツをロシアと結びつけ、ドイツのロシアへの輸出にとって最大の重要性を持つポーランドの鉄道へのドイツの影響力を放棄することは出来ないのだ、と⁽¹⁰⁹⁾。私は至るところで、きわめて明確な形で、ポーランドの国家としての構築には一切同意しない、従ってオーストリア国内のドイツ人地位を傷つけ、彼らの影響力を弱めるであろうような、ポーランドの王国への統合には、いかなる形態においてであれ一切同意しない、という確固とした意志を見いだしました。人々はやっと、オーストリア国内でのドイツ人の優位が、我々の同盟の確実な持続にとっての不可欠の条件である、という認識に到達したのです。ベルリンでは、人々は、これら二つの方向でのきわめて強力な保証がなければ、ポーランドの構築を承認しないでしょう⁽¹¹⁰⁾。たとえばヴェルフ家かヴィッテルスバッハ家の王族による、そしてそれと並んでドイツ人の総督を置く形で、コングレス・ポーランド（Kongreßpolen）の版図での、独立ポーランドを設立するという構想は、しばしば考えられ、また表明もされたひとつのプランなのですが、これは背景に退いてしまいました。またこのプランは、ガリチアがそうなればきわめて猛烈なイレデンチスムス（Irredentismus 失地回復運動）にゆだねられることになるでしょうから、我々としては受け入れられません。です

から、何らかの形態での王国への併合だけが残る訳ですが、当然のことながら、軍部が要求するであろう国境線の改訂は、ドイツに対して留保されなければなりません。わが国への合併に際しては、二つの重要な事実が問題となります。ロシア領ポーランドにガリチアを加えると2千万の人口となります。オーストリアからガリチアを引いても同じ数になります。したがって、二つの大きなブロックが対峙することになり、そのなかで、ポーランド民族のほうはるかに同質の度合いが高く、そこで民族的な力のせめぎあいでは、はるかに有利に作用します。考慮しなければならないであろう第二の事実は、いかなる形にせよポーランドへの編入に反対するウクライナ人の抗議です。彼らは私と同じ時期にベルリンに来ていて、そこで彼らの計画を発表しました。それは、ポーランドをドイツ語を国語とする分離した王領地とするというものです。

当地では今やこのポーランドのオーストリアへの合併が目標とするきわめて多様な憲法上の結合のあり方と取り組んでいるようです。わが国の現在の帝国国会（Reichsrat）の権限の分割を基礎とする、より狭義の帝国国会と、より広義の帝国国会とが考えられています。より狭義の帝国国会のなかではドイツ人が当然多数を占め、この国会には、国内行政、司法、教育、地方文化、租税の一部が帰属することになるでしょう。他方、そこではオーストリア人とポーランド人が共に議席を占めるより広義の帝国国会には、共通の事項、したがって通商政策、国防法、貨幣制度、共通の租税などが帰属することになるでしょう。この広義の帝国国会のなかでは、我々ドイツ人は、絶望的な少数派の立場に追い込まれてしまうでしょう。それもまさしく国家の最も重要で決定的な事項について、そうになってしまうでしょう。このことが当地では理解されているので、人々はズプデレガチオンの思想にたどり着いたのです⁽¹¹¹⁾。人々は、この広義の帝国国会が代議員会（デレガチオン）として構成されることを望んでいますけれども、我々のオーストリアの代議員に、

「ベルンライター文書」に見た第一次世界大戦中の「中欧」経済同盟計画（下）

ロシア領ポーランドの代議員が後から加えられ、両代議員会の貴族院の構成員がこれに対応して数が増えるようになることを望んでいます。なぜならば、貴族院の構成員はこれまで通り、代議員全体の三分の一を占めなければならないであろうからです。数からいえば、現在の代議員は（最善の場合）次のような構成となっています。ドイツ人 18 人、チェコ人 8 人、ガリチア人 7 人、イタリア人 4 人、南スラヴ人 2 人、ルーマニア人 1 人。ですから、ドイツ人 18 人に対して非ドイツ人 22 人に加えて貴族院の構成員 20 人、となっています。今存在している解決案によれば、ロシア領ポーランドには 10 人の新しい代議員が割り当てられるでしょうからポーランド人の数は 17 人に増えることになるでしょう。新しい全体の割合は、これによると、ドイツ人 18 人に対して非ドイツ人 32 人に、25 人の貴族院の構成員ということになるでしょう。後者のなかでは、当然のことですが、ポーランド的要素が割合からいえば強化されるでしょう。この貴族院という組織が、ポーランドの最重要事項のみならず、西オーストリアの最重要事項についてまで、決定をくだすことになるでしょう。我々ドイツ人は、ありうべきあらゆる妥協に頼らざるをえなくなり、にもかかわらず我々は最大の租税負担者である、ということになるでしょう。しかも、オーストリアのなかのドイツ人以外の民族や潮流に、今よりもはるかにひどく左右される、という状況のなかでそうなるのです。回避することの出来ない結果は、その規模が全く予想もつかないドイツ人のイレデンチスムスでありましょう。ズプデレガチオンのこの構築は、私の意見では、次の理由からもやはり、達成は不可能です。その理由は、それが、国家の最重要事項、例えば防衛問題を、普通選挙権から引き離し、その成立当初から政府の単なる道具と考えられ、また実際そうであった組織に割り当てられる、ということです。この構築に際して、非常に僅かしか考慮されていないのが、この憲法上の結合に即応するであろう官職の構成です。ワルシャワでは、わが国のオーストリア州議会の権限と狭義の帝国議会の権

限をみずからのなかに含む、ある種の州議会が考えられています。しかし、このポーランドというブロックを特別の大臣が統治するのか、それとも国務次官か局長が統治するのかについて、そして、このポーランド政府がウィーン政府とどのような有機的な結合へともたらされるのかについて、人々の見解は明らかに到底明確とはなっていません。これらの考えの全ては、オーストリア・ハンガリーの二元主義の全形態のなかで動いています。ティサは、現在の二元主義は一切揺さぶることは許されない、という見解に絶対的に固執しているように見えます。この見解によれば、したがって、ポーランドのオーストリアへの編入は、オーストリア憲法の内部で遂行されるべきだ、ということになります。しかしこれに対しては、チェコ人が異論を唱えています。二千万人のポーランド国家の構築によって、三元主義（トリアリスム）が現実化します。そして逃げ道は一切ありません。それ以外のどのような構築もポーランド人をも満足させないでしょう。ポーランド人を満足させることが不可能なのであれば、彼らを直ちにロシアに委ねたほうがましです。このやり方は、不満を持つポーランド人を煽動し続ける上で最大の成果を挙げられるでしょう。

ドイツでは、完全な三元主義については、すでに上に詳しく述べた理由から懐疑的です。人々は次の疑問を持っています。王国はポーランドを消化する能力を持っているのか。すなわち、ポーランドを国内でも対外的にも、ドイツに友好的な軌道の上に保持する能力を持っているのか、という疑問です⁽¹²⁾。また、ポーゼンや西プロイセンやシュレージエンへの跳ね返りについては大丈夫なのか。今はポーランド人はどんなことでも約束するが、彼らはそれを将来も守るのか。そしてオーストリアのこれからの歴代政府は、この三つの取り合わせを確実な政治上、軍事上、経済上の同盟政策の航路のなかに維持するのに十分なだけ強力かつ首尾一貫したものであるであろうか。私はしかし、このような異論に対して、ポーランド人は、どのような場合に

「ベルンライター文書」に見た第一次世界大戦中の「中欧」経済同盟計画（下）

も、重大な問題を投げかけるのだ、という所見を述べました。なぜならば、どのような形でポーランドが併合されるにしても、ポーランドのブロックの民族的な重みが重圧として感じられるようになるからです。賢明な政策と良く熟考された、ポーランド人の自意識を傷つけない、しかし効果的な当局の処理がポーランド行政に確実性と安定性を付与するのに成功する場合にのみ、そしてまた、きわめて多様な利害を有する新しいポーランド帝国国会が、何よりも先ず、経済上、王国に、そしてそれによってドイツに同化することに成功する場合にのみ、この合併を中心の両国家にとって無害なものにすることが出来るのです。

ハンガリーの三元主義に対する態度についていうならば、ティサの硬直した態度は、けっして一般的な見解ではありません。アンドラーシ⁽¹¹³⁾は、最近、ベルリンから帰って私のもとを訪れ、腹藏なくあからさまに、そのもたらす全ての結果を含めて（したがって三つの代議員会をも含めて）三元主義に賛成すると語りました。昨日、私は、勿論労働者党には属してはいませんが重要なハンガリーの政治家達と話す機会を得ました。彼らは、かなり長い話し合いの後で、結局やはり唯一の打開策としての三元主義に賛成すると語りました。わが国のドイツ人は、この問題についてまだ全く態度がはっきりしていません。ウルバンが、非常に良い歴史的な報告書を作りました。人々はポーランド人をいかなる条件のもとでも、そしていかなる形においても、帝国国会に入れたくないのですが、それでもなおポーランドを手放すつもりはないのです。

これら全ての考え方は、なぜプロイセン保守党のなかに、この会派の最も卓越した著述家であるヘッチュ教授⁽¹¹⁴⁾を通じて私が接触したハイデブラン⁽¹¹⁵⁾がそうなのですが、次のような見解が次第次第に通用するようになったかを、理解可能にします。それは、ポーランドを、ドイツと我が王国に有利な国境線の改訂を施した上で、もしそれと交換に単独講和が獲得出来るの

ならば、ロシアに返還するのが一番良いのではないか、という見解です。圧倒的に多数の人々はしかし、この見解を幻想的なものと見なしています。そして私は、ベルリンでこのような示唆を受けるといつも次のように主張します。すなわち、ロシア人から、バルカンとコンスタンチノーブルへの伝統的な要求と野心を決定的に奪い去ろうとして、そしてこのことがロシア人を我々の宿敵にせざるをえなくするのですが、そうしておいて、他方でロシア人をポーランド返還によってふたたび力付け、彼らをヨーロッパに対してその立場をふたたび強くするというのは、矛盾である、と。

ですから、私が情勢全体を集約すると、私は、今やまさに我々が我々のもとでポーランドに関して明確で決定的で、かつ実行可能なひとつの結論に到達すべき時である、という結論にたどり着きます。我々はこのことによって多分おそらくドイツ国内のさまざまな揺れ動く意見に対して、ドイツが要求している保証に関する一定の提案をつけ加えることが出来るでありましょう。しかしこの件が先送りにされると、我々は両国とも、講和会議までにポーランド問題に関して合意に到達しないことになります。その場合には、我々はすでに講和会議の席上ですら調和のある協力をしないことになります。そして、もし我々がにもかかわらずポーランドを獲得するという場合には、私の意見ではきわめて不幸なものとなるであろうようなひとつの苦しまぎれの解決策の採用される危険がおこりやすいでしょう。それはすなわち、1794年から1807年ないしは1809年まで、プロイセンとオーストリアの間ですで行われたようなポーランド分割であります。この苦しまぎれの解決策はしかし、ロシアの煽動に門戸を開放し、ポーランド人を中心の両強国から離反させるでありましょう。

これに加えて私は、私の十日間の滞在中、さまざまな人々と語り、またさまざまな人々と、社交的な集まりで知り合いになりました。平和待望は大なるものがありますけれども、人々は戦争が長期にわたることを覚悟していま

す。しかし、来るべき講和の大問題をどの側面から観察するにしても、ドイツとオーストリア・ハンガリーの間の、それも時機を失することのない完全な了解の必要性が人々の心に迫ってきます。政府のサークルの外側では、このことはわが国でも非常に強く意識されています。議会もなく、新聞もなく、自由な集会権もない状態で、オーストリアの我々は、全ての討論から閉め出されています。我々の政府は、オーストリアの政府も、ハンガリーとの共通政府も、誰とも接触せず、いかなる情報をも取り込まず、いかなる情報をも与えません。我々に何がおこっているのか、我々の将来と存在とを決定するであろう問題がどのように形作られうるのかを知りたいという当然の欲求が、わが国ではむぞうさに無視されています。他方ドイツ政府は、当然のことながら国家機密を漏らすことはしませんけれども、議会を通じて、またその外側でも、国民の政治的知性と緊密な接触を保っています。反発と牽引の自然法則から、次のことは説明がつきます。それは、全てが王国からベルリンへと巡礼をするということです。ハンガリー人、ドイツ人、ポーランド人、ウクライナ人、ルーマニア人、ジーベンベルゲンのザクセン人、それどころかチェコ人までもがベルリンへと巡礼をしています。結局のところ誰でも、自分の身に何がおこっているのかについて、いくらかは知りたいと思うのです。顕著な例があります。最近ザルツブルクで、ドイツ帝国のドイツ人とオーストリアのドイツ人の国会議員の会合がありました⁽¹¹⁶⁾。ドイツ帝国のドイツ人は、出発の前に首相を訪問し、彼らがザルツブルクでどのような態度を取るべきかについて、首相とともに確認しているのです。こちらではドイツ人と何らかの接触をする人物は疑われるだけで、悪名高い外国人条項をご覧いたださればよいのですが、まさしく警告を受け、最善の意図をもってでも、ドイツ人と接触することを妨げられるのです。このことは勿論全てベルリンでは正確に観察されています。そしてどのような結論がそこから引き出されるかは明白です。

この手紙の内容を秘密にさせていただくことをお願いしながら、君に心からの挨拶を送ります。

追伸：最も皮肉なのは、チェコ人がベルリン経由で、オーストリアのドイツ人を彼らとの何らかのアウスグライヒ（妥協）へと動かそうとする試みを行なっているらしい、ということです⁽¹¹⁷⁾。

〔史料解説〕

《第一の史料について》

ベルンライターがこの手紙を書くに至ったいきさつについては、彼自身による前書きからうかがうことが出来る。また、第二の史料の内容も、この前書きと趣旨において一致している。チェコの名門の貴族で侯爵のロブコヴィッツという、オーストリアのなかでもとりわけ保守的な層に属する人物が、ハンガリーに対する従来の不信の念を棄てて、オーストリアとハンガリーとの、アウスグライヒ（妥協）に基礎を置く二重王国の体制の維持に協力する姿勢を示すようになったことを、ベルンライターは大いに歓迎している。そして、ロブコヴィッツが、二重王国の体制の維持に同意した上で、二重王国とドイツ帝国との結合を必要であると説いていることにも、ベルンライターは全面的に賛成している。二重王国とドイツ帝国との結合によって、新たに「中欧」経済同盟計画を推進しようとしていたベルンライターからすれば、この保守的なチェコ系貴族がこのような考え方を示すに至ったのは、よるこばしい事態であったに違いない。もちろん、1906年12月1日にさまざまな議論をへて成立し、1907年1月26日に皇帝の承認をえて成立した普通平等選挙権を制限してしまおうという、いかにも保守派の貴族らしい発想に対して、ベルンライターが異を唱えたのは、イギリスの労働者の組織に関心を寄せて著作まで刊行している彼としては当然の反応に他ならなかった、と考えられ

「ベルンライター文書」に見た第一次世界大戦中の「中欧」経済同盟計画（下）
る⁽¹¹⁸⁾。

《第二の史料について》

この手紙の宛先のアレクサンダー・ヴェケルレは、注42で記したように、これまで二度にわたってハンガリーの首相をつとめ、のちに1917年8月から1918年10月という、戦争末期のハンガリーにとって運命的な時期にも首相の座につくことになる、ハンガリー政界の大立者である。この手紙は、ロブコヴィッツの小冊子をヴェケルレに送付するに際しての説明であると同時に、ハンガリーの側がオーストリアに対する不信を棄ててほしい、という願望の表明でもある。そして、二重王国とドイツ帝国の経済的接近に、ハンガリー側が理解を示してほしい、という希望もつけ加えられている。

しかし、ハンガリーがオーストリアに協力する可能性について、ベルンライターは現実には悲観的な見通ししか持っていなかった。このことは、先に検討した彼の「王国のドイツとの戦後の経済政策上の関係についての報告書」から明らかである。彼はそのなかで次のように述べている。

「ハンガリーでは、はっきりと分離主義的なものであるところの経済的傾向が顕著である。この傾向は、この目的のために、より大きな経済領域の意義を否定している。また、オーストリアとハンガリーの間に政治的結合もまた存在しているという事実を無視するか直接に否認している。しかもその目的は、経済的にも絶交しようということにある。将来の通商条約は、もっぱらハンガリーの利害に合わせたものとならなければならないであろうし、ハンガリーの全経済政策にとって決定的なものとなる筈の、完全に切り離されたハンガリーの貿易の決算が計算されている。この方向が表面化すれば、域内関税か調整関税を基礎とするドイツとの経済的連合の理念に、オーストリアとハンガリーの間の域内関税か調整関税への要求が対置されることを、我々は覚悟していなければならない。ハンガリーのこのような態度は、ここで表

明されている思想を無に帰せしめるであろう。ハンガリーは、戦後、戦時中にハンガリーが王国と王朝に対して行った、否定しがたい大きな貢献を引き合いに出すばかりでなく、それに対してオーストリアでは弱体な政府が対峙しているところの、ハンガリーの強力な政府のおかげも加わって、大なる自意識をもって立ちあらわれるであろう。ドイツと王国との経済的な接近への強い期待と偉大な行進とを無に帰せしめるのがハンガリーである、ということになれば、この事態はオーストリアのなかに、王国の両国家の将来の関係全体に破局的な作用をするであろう感情を爆発させるであろう。我々の通商政策における必要な大きな転換をめぐるハンガリーとの意思の疎通は、従って第一の重要性を帯びているのである。」⁽¹¹⁹⁾

この「報告書」(エクスポゼ)の内容と読み合わせれば、この手紙でのハンガリーの有力政治家へのベルンライターの呼びかけは、ハンガリーの協力についての暗い見通しをおもてに出すのを極力抑制しながら発せられた悲痛な叫びであったとみてよいであろう。ハンガリーの協力が見込めないならば、ベルンライターなどが熱心に推進していた「中欧」経済同盟計画は、その足下を掘りくずされ、そもそも実現などおぼつかないことになるからである。

《第三の史料について》

この手紙は、オーストリア上院で同じ立憲党に属する友人のフルステンベルクに宛てたものであるだけに、第一の史料や第二の史料のようにいわば畏まった表現が少ない分だけ、本心を吐露していると同時に、議論が具体的であり、詳細にわたっている。この手紙での中心論題はポーランド問題である。1915年8月7日にはドイツ軍はワルシャワを占領し8月18日にはさらに東のブレスト・リトフスクを占領した。こうして旧ロシア領ポーランドはドイツ側の手に帰した。ここに、ポーランドをどのように処遇すべきか、ドイツが旧ロシア領ポーランドを全部自国に併合してしまうのが良いのか、そ

「ベルンライター文書」に見た第一次世界大戦中の「中欧」経済同盟計画（下）

れともオーストリア・ハンガリーに委ねてしまい、ドイツは軍事上必要な地帯をこのポーランドから取り上げるのみにとどまるのが良いのか、という問題が浮上する。本文で述べたように、前者が「ゲルマン式ポーランド問題解決案」、後者が「オーストリア式ポーランド問題解決案」と呼ばれていた。ベルンライターは、この手紙のなかでドイツ外相ヤーゴーへの不満を述べているが、1915年9月2日付けのヤーゴーの覚え書きは、後者を選択すべきことをドイツ政府の外交担当者が主張していたことを示す明確な記録である。ヤーゴーは、ポーランド問題について、完全な独立、ドイツ乃至プロイセンへの併合、ドイツとオーストリア間での分割、の三案の得失を簡単に比較したあと、「オーストリア式ポーランド問題解決案」だけは、以下のように極めて詳細に検討している。

「オーストリアの宗主権のもとでの自治国ポーランド。ウィーンの指導的な層はこのことを希望している。これ以外の領土的な勝利の代価はドナウ王国にとってほとんど見いだしがたい。そして、同国にこれを与えないでおくことは困難である。

ウィーンは、ポーランド併合をいわゆる『準二元主義』（Subdualismus）の形で考えている。すなわち、六百万のガリチアのポーランド人と、新しく加わる筈の千二百万のコンGRES・ポーランド人を、オーストリアに対してクロアチアのハンガリーに対する関係のような関係となるであろうひとつの王国に統合することを考えている。その結果は、ポーランド人へのある程度の権利の付与と、彼らのオーストリア帝国国会（ライヒスラート）からの排除ということになるであろう。この帝国議会へは彼らは、特定の彼らにも共通する問題に限って、代表団を派遣出来るということになるであろう。ポーランドはこれにより、財政的に独立し、もはやこれまでのようにオーストリアからの財政支出をしてもらうことはなくなるであろう。ここからオーストリア国内のドイツの要素（Deutschtum）の強化という利益が生ずるのである

う。事態がこのようになれば、イレデンチスムスの諸潮流も生じるかもしれないが、それらはそれほど強くはならないであろう。なぜならば、我々のもとにいるポーランド人は、オーストリアの主権のもとにいた同国人よりも、経済的にいずれにせよより繁栄するであろうからである。我々はウィーンに圧力をかけることによって、このような傾向の出現を、よりたやすく防ぐことが出来る。さらに我々は、オーストリアに対して若干の要求を提出しなければならない。これらの要求は、わが国の旧ポーランド地域のなかのドイツ的要素を強化することに貢献するであろう。例えばその割譲を我々が軍事的な理由から要求しなければならない国境地帯のポーランド人をそこに入植させることの出来るポーランド王領地の一部を譲渡せよ、という要求がそれに含まれる。加えて、ウィーンでは、我々がオーストリア出身のポーランド人やユダヤ人のプロイセンやドイツの国籍への受け入れを一切拒否するものであるということが、最初から明らかにされていなければならない。

最も困難な点を形成するのは経済問題の、すなわちわが国の貿易の調整である。ロシアへの輸出は、自由な通過によって確保されうるかもしれない。しかし、わが国のロシアへの輸出の優に約三分の二、すなわち四百万から五百万を（旧ロシア領）ポーランドが引き受けていた。この良好な輸出の状態は、ポーランドが将来オーストリアとは別個の関税領域を形成する場合にだけ、おそらく確保されるであろう。このことはハンガリーとの間にすら域内関税も有していないオーストリアによっては達成不可能であろうし、オーストリアがガリチアを含めてのポーランドに対して関税障壁を設立すべしとは先ず要求出来ない。従ってここで他の保証が見いだされなければならない。

千二百万の新しい臣民を有するこれほど広大な地域が加わることによって、オーストリアは、我々にとっての隣人としてはあまりにも強力になり過ぎるであろうし、政治においては永遠の同盟を編みだすことは出来ないものであり、ウィーンの政策はいつか我々に刃向かう（gegen イタリアで強調してあ

る）ものとなるかもしれない、という反論が為されるかもしれない。この拡大はしかしながら、ハプスブルク王国の特殊性からすれば、まだ到底内的な強化を意味しない。オーストリア国内のドイツ的要素は、自己の王国であるポーランド王国の創設によって強化され、それによって王国の政治全体により大きな影響力をも獲得するかもしれない。しかしドイツ的分子にとっては、将来、自殺を欲しないのならば、我々と協力する以外の道はない。おそらくウィーンの宮廷貴族、聖職者、老いた軍人の間には、66年のこと（1866年の七週間戦役でプロイセンに破れた屈辱をさす）を忘れることが出来ず、プロイセンの成り上がり者が古い帝国を凌いでしまった痛みを克服出来ないでいる多くの分子がまだ残っているであろう。しかし、彼らは死に絶え、より若い世代は思考を転換することを学んだ。オーストリア国内の大部分のドイツ人を、ドイツ帝国へのしっかりした依存だけがオーストリアを救うことが出来るのだ、という確信が今や貫くに至っている。

にもかかわらずドナウ王国内の分離主義的諸傾向がポーランド併合によって勢いを弱めるとは予想出来ない。なるほどチスライタニエンでの、そこからはハンガリーだけが利益を引き出すことが出来る、万人の万人に対する戦いは、ドイツ人の優位がそこでふたたび確保され次第押さえられるであろう。なканずく彼らは、国家の管理が完全に麻痺していない場合には、チェコ人を窮地においこむことが出来るであろう。にもかかわらず分離主義は、それが三つのかなり大きな民族の基盤の上に展開されうる時には、むしろより強力になるであろう。マジャー人とならんで強化されたドイツ的要素と増大したポーランド的要素がマジャー人とならんで存在することになる。三つの集団全てのなかで、彼らが相互に独立して生活出来るようになればなるほど、国民としての特性が、そしてそれに伴って分離要因も、ますます強力に発展するであろう。結局のところ憲法上ではそうでなくとも、事実上はそうなる単なる同君連合は、融合へと導くことは出来ない。これらの集団のばら

ばらな分離に向かっている王国の事態の推移は、多分押しとどめられはするであろうが、完全に回避されることはほとんど不可能であろう。崩壊はドイツ人の影響が優位に立つ限りは避けられる。そしてそれは我々への依存を求めねばならない。ひとたび危機が訪れると、オーストリアのドイツ人諸州は我々のものとなるであろう。そして我々は、この万一の場合に備えて、ドイツ的要素が強力且つ存続可能であり続けることに、最大の関心を有するのである。その時には、ポーランド人がふたたび独立する瞬間も来るであろう。多分ポーランド人はその間にコンGRESS・ポーランドとガリチアの統合の後で、独立の国家生活が営めるほどに発展しているであろう。我々はその時に、ポーゼンを、いかなるイレデンチスムスの危険も存在しないという程度にまで、ドイツ的要素で貫き通していたいものである。」⁽¹²⁰⁾

ヤーゴアのこの覚え書は、ベルンライターのフルステンベルク宛の手紙や、日記の記述と考え合わせると、多くの興味深い論点を示唆している。ここでは、この覚え書が、「人々はやっと、オーストリア国内でのドイツ人の優位が、我々の同盟の確実な持続にとっての不可欠の条件である、という認識に到達したのです」という、この手紙のなかの見方を裏打ちしている点に特に注目したい。ヤーゴアは、二重王国の前途についてむしろ悲観的であるが、オーストリア国内のドイツ的要素だけは強力であり続けてほしい、という見解では一貫している。王国が崩壊すればしたでよい、その時にはドイツ人の居住する諸州がドイツに帰属するのであるから、という箇所さえあるのは、ここで見てきた通りである。ポーランド問題については、王国に併合するのが良いという、かなりオーストリア寄りの態度を示しているが、彼の関心は結局のところオーストリア国内のドイツ人の運命に集中している。また、オーストリア領となるポーランドの一部を、ポーランド人を入植させて、ドイツ領から移住させてしまうために要求する、などと述べている箇所は、のちのオーデル・ナイセ線問題を考えると、ひどく皮肉な響きがある。かつて

「ベルンライター文書」に見た第一次世界大戦中の「中欧」経済同盟計画（下）

のカーゾン線の東側のポーランド人を旧東ドイツの東部に移住させるソ連の政策から生まれたのが、この問題だからである。

第三の史料では簡単に言及されるにとどまった王国の外相ブリアーンのベルリンでのドイツ首相ベートマン・ホルヴェークや外相ヤーゴーとの会談は、1915年11月11日に行われた。ベルンライターのブリアーン評価は低いが、この会談は、ポーランド問題と「中欧」関税同盟を主要な議題とする、重要なものであった。会談のひとつの結論としての関税同盟案は、13日付けのドイツ政府の公式文書として、ウィーンに送付される。以下にそのうちの「プロメモリア」と題された部分と、「付属文書」(pièce jointe)の一部を訳出する。

「現在の戦争によってドイツ帝国とオーストリア・ハンガリー王国の同盟は血を以て証明され、双方の軍隊はたぐいまれな戦友の間柄において、肩を並べてほとんど全ヨーロッパを敵にまわして戦ったのであるから、ドイツ帝国政府は、両帝国間の、両政府間の、そして両国民間の関係がきわめて親密かつ解き難いものとなったので、この関係がより確固たる条約の形式によって公式にかつ実質的にその表現を見いだすべきであろうと信ずる。ドイツ帝国政府は、両帝国が、政治的、経済的、軍事的な性格の諸条約によって、さらに一層緊密に結合することを望ましいことと考える。軍事的協定は双方の軍事当局による協議に留保されなければならないが、ドイツ政府はこれと同時により緊密な経済的連結（アンシュルース）の形成のための一般的な視点を送付する。それらは、今後の協議と決定の基礎として役立つ。

1879年10月7日の同盟条約は本質的にロシアに対する防衛条約に過ぎない。同盟関係のより緊密な形成についての交渉は、締結されるべき講和条約とそれに即応した同盟発動の場合の拡大の土台の上に立って相互の資産の保証から出発しなければならないであろう。

とりわけ経済的な関係において両国の諸民族が新しい情勢により良く順応出来るように、また多くの最初はおそらく対立する利害が調整されるように、

また他の諸国にも中心の両強国の団結が国際政治の持続する要因と映ずるように、帝国政府は、かなり長い期間にわたる、例えば三十年有効な条約が締結されなければならないであろう、という見解に立つ。

帝国政府はしかし、この、両国の関係を長期にわたり決定する瞬間に、さらになお帝国政府には決定的に思われるひとつの要因に言及すべきであると信ずる。

ドイツとオーストリア・ハンガリーとの同盟が1879年に締結された時、この締結はマジャール人がハンガリーのなかで、ドイツ人がオーストリアのなかで優位に立つという、アンドラーシとデアークの理念の基礎の上で実行された。ハンガリーのなかでは、この原則が貫徹され、発展ずることが可能となったのに反して、オーストリアのなかでは、時間が経過するにつれて、この原則はたびたび損害を受けた。オーストリアの王冠をいただく諸州のなかでは、それによってそこでのゲルマン的要素が同盟締結の際にこれらの要素に与えることが考えられていた指導性を部分的に喪失する展開が生じた。

戦争の経緯により、そして場合によっては広い地域の切り放しを結果としてもたらすかもしれないロシアの敗北により、中心の両強国とロシアとの間の敵対が先鋭化され、持続するであろうから、オーストリアのなかでの非ドイツ的要素のこれ以上の強化は、我々の同盟の基本と両締約国の対外的利益に逆行するものと考えられる。帝国政府はそれ故に、以下のことを行う時、自己維持の命ずるところに従っており、また、帝国政府の信ずるところによれば自己の利益と王国の利益ならびに希求すべきより広範にしてより緊密な同盟関係の利益において自己維持の命ずるところに従っていると信ずるものである。それはすなわち、帝国政府がオーストリア・ハンガリー王国政府に、後者にとって適切と思われる方式で、それによってオーストリアの進行するスラヴ化が阻止され、ゲルマン的要素に対してオーストリアの利益においてゲルマンのオストマルクに帰せられる指導的な地位がふたたび配分されるよ

「ベルンライター文書」に見た第一次世界大戦中の「中欧」経済同盟計画（下）
うな予防措置を講ずるように切に考慮を提案することを行う時を意味するのである。」⁽¹²¹⁾

この文書は以下に続く「付属文書」のなかで展開されている関税同盟計画についての序論を形成していると同時に、オーストリアのなかでゲルマン的要素の維持と強化に努めてもらいたいというドイツ政府の期待が、スラヴ化の進行を阻止せよという、内政干渉に等しい表現をともなって露呈されている。フリッツ・フィッシャーは、外相ブリアーンが、この文書に対する回答のなかで、さすがにスラヴ化の進行という指摘だけは否認した事実を指摘している⁽¹²²⁾。「付属文書」は、この時点でドイツ政府がどのような「中欧」経済同盟計画の構想を抱いていたかを示す上で重要かつ貴重な史料である。その前半を訳出しておきたい。経済同盟は全て関税同盟と表記されている。

「経済的な観点からは、ドイツ帝国とオーストリア・ハンガリー王国の間に「相互の関税の優遇をともなった関税同盟」（原文はイタリック）が希求されるべきであろう。この関税同盟は全領域の、ひとつの経済的統一体への融合への道を開くという目的を追求する。関税同盟の締結のなかに存在する危険に対してドイツの貿易に代償を提供するためには、同盟は現状の悪化が排除されるという傾向によって支えられていなければならない。逆に最初から、両者の関税率の、関税の撤廃の方向での漸進的な接近への道が開かれ、この目的のために関税率の基準と関税を可能な最大の範囲で統一的に形成する、という意図が発表されていなければならない。

関税同盟はかなりの長期間（例えば三十年）にわたって、それぞれ十年の経過ののちの改訂期限付きで締結されなければならない。それは、経済状態の相互の結びつきに対して必要な確実性を付与するためである。

その際、十年後にありうべき改訂は、関税引き上げの傾向ではなく、さらなる関税の引き下げの傾向を追求すべきであるということが、述べておかれなければならない。

関税の高さが同盟諸国の通商において確定されていて、いずれにせよ他方の了承なしに変更されないための配慮もまた為されなければならない。

さらに、両同盟国の外部の諸国家への通商関係の調整に際しての協力が希求されなければならない。オーストリア・ハンガリーとのこのような同盟を締結する「前提」（原文はイタリック）は、現行の契約関税率と比較して、この同盟がオーストリア・ハンガリーへの我々の輸出条件の現実の改善をもたらすということである。他方で、この同盟は、オーストリア・ハンガリーからドイツへの輸入に対しても、これまでよりもより有利な条件を提示する可能性を創出しなければならない。（以下省略）」⁽¹²³⁾

ここに訳出した二つの文書こそ、フィッシャーが、ドイツの戦争目的としての「中欧」計画（ミッテルオイローパ・プログラム）をオーストリア・ハンガリーに公式に通告した文書として重視している基本的な史料である⁽¹²⁴⁾。そのなかには、ゲルマンのオストマルクとしてのオーストリアという不吉な表現も用いられている。なぜ不吉かという、のちにヒトラーによってドイツへのオーストリアの併合、アンシュルースが実現された直後、オーストリアは実際に、このそもそもは中世に由来するオストマルクと改称されたからである。この表現は、そもそもは中世に由来する。

ここでのドイツ側の提案は、ベルンライターの「報告書」の第三章で展開された、国際法的な基礎の上に立つ経済同盟の案と類似したものであり、「報告書」の第二章で展開されている憲法的な基礎の上に立つ経済同盟の案とは性格を異にしている。本文で詳述したベルンライターの「報告書」ならびにその第三章の案をさらに具体化したベルンライターの「覚え書」（デンクシュリフト）と対比すると、興味深いものがある。ベルリンとウィーンの両政府の間での、関税同盟計画ならびにポーランド問題をめぐる交渉は、ほとんど両国の敗北が確定するまで、延々と続けられるのであるが、ここでは、1915年11月までの時期に考察を限定しておく。ベルンライター文書は、オー

「ベルンライター文書」に見た第一次世界大戦中の「中欧」経済同盟計画（下）

スロバキアの側で、関税同盟計画ならびにポーランド問題について、どのような議論が展開され、どのような構想が提示されていたかを、つづきに示している。とくに「中欧」という観点から、ベルンライター文書のごく一部を紹介し、可能な限りでコメントと考察を加えてきた。以下に、ウィーンの国立文書館に保存されているベルンライター文書全体の構成を示しておきたい⁽¹²⁵⁾。なお、第三の史料のなかに何度か言及されている「コンGRESS・ポーランド」とは、1815年6月9日のウィーン会議（コンGRESS）最終議定書によって、ワルシャワまで含めて拡大されることとなったロシア領ポーランドをさす⁽¹²⁶⁾⁽¹²⁷⁾。

Verzeichnis der Bestände des Baernreither-Nachlasses

1. Personalakten und biographisches Material. Archivalische Studien Baernreithers
2. – 3. Literaturstudien Baernreithers
4. – 7. Tagebücher
8. Einzelne Tagebuchnotizen und Bruchstücke von Tagebüchern
9. –10. Verschiedene literarische Arbeiten, Zeitungsartikel und Reden
11. –12. Manuskripte der für den Druck bestimmten Lebenserinnerungen
13. Ministerium für Volksgesundheit und soziale Fürsorge
14. Gesetzesvorlagen 1917, Geschäftsordnung 1917
15. Handelsministerium
16. –17. Verschiedene Akten, Denkschriften, Zeitungsnotizen u. dgl., welche mit der parlamentarischen Tätigkeit Baernreithers zusammenhängen, bis 1925
18. –19. Jugendfürsorge und Jugendstrafrecht
20. Mitteleuropäischer Wirtschaftsverein 1916, Handelspolitisches Komitee 1916, Orient- und Überseeengesellschaft 1917/1918, Kriegspatentschaft
21. –24. Soziale Versicherung
25. Bruderladen
26. Bank und Valuta
27. Seeversicherung, Zucker

- 28. -29. Österreich-ungarischer Ausgleich
- 30. Österreich und das Deutsche Reich
- 31. Sprachenfrage und Sprachengesetze
- 32. -36. Böhmen: Verhältnis zwischen Deutschen und Tschechen
- 37. Tschechische Bewegung im Weltkrieg, Verschiedene Zeitungsausschnitte
- 38. Polen
- 39. -40. Die südslawische Frage und die Entstehung des Weltkrieges, Serbien-Wirtschaftliches
- 41. Geschichte Bosniens und der Herzegowina
- 42. -46. Bosnien und die Herzegowina: Politik, Agrarwesen, Verwaltung, Kirchliche Fragen, Eisenbahnen, Annexion; Material zu Baernreithers Broschüren von 1908 und 1913
- 47. Korrespondenzen
 - aa, bb, cc, Material zur Herausgabe der Lebenserinnerungen
 - 3 Schachteln Briefe und Aufzeichnungen⁽¹²⁷⁾

注

- (94) Tagebuch Baernreithers, Bd. 15, S. 2ff.
- (95) A. a. O., S. 1.
- (96) Zdenko Fürst Lobkowitz (1858-1933): ベーメンの大土地所有者。ピリンは現在のドイツとチェコの国境にあるベーメンのエルツゲビルゲ(エルツ山地)の山中に位置する都市。
- (97) Stephan Graf Tisza (1861-1918): 1903-1905 年, 1913-1917 年にハンガリー首相。
- (98) Erwein Graf Nostitz-Rieneck (1863-1931): 1891 年以来オーストリア上院議員, 1902-1913 年ベーメン州議会議員。
- (99) Alexander Wekerle については注 42 参照。
- (100) Karl Urban については注 18, 注 41 参照。
- (101) Tagebuch Baernreithers, Bd. 15, S. 11ff.
- (102) Joseph Sztérény については注 41 参照。
- (103) 注 119 に対応する史料解説にオーストリアとハンガリーの関係についてのベルンライターの悲観的な見通しを訳出した。
- (104) Tagebuch Baernreithers, Bd. 15, S. 73ff.
- (105) オーストリア・ハンガリー共通外相ブリアーンの 1915 年 11 月 10 日と 11 日のベルリン訪問については史料解説のなかで扱った。

- (106) Bethmann Hollweg が Friedjung に対してバルカン情勢について述べた内容については以下に記録されている。Tagebuch Baernreithers, Bd. 15, S. 48f. ベートマンはこの機会にセルビアと「可能な限りすみやかに」和平を締結したいとの希望を表明し、また、「ドイツは二度と再び独立したアルバニアとかかわりを持たないであろう」と述べた。他方で南アルバニアが Valona（ヴァローナ）とともにギリシャに併合されることを主張しているが、これはベルンライターがこの手紙で述べている期待には背馳していた。ヴァローナはアドリア海に面した港で今は Vlone（ヴローネ）と呼ばれている。
- (107) Vgl. Brief Baernreithers an Fürstenberg vom 2. November 1912: Baernreither, *Fragmente*, S. 168.
- (108) Baernreither, *Fragmente*, S. 218.
- (109) Vgl. Fischer, a. a. O., S. 254.
- (110) ヤーゴーがオーストリア国内のドイツの要素の維持に大きな関心を寄せていた事実は、本文中に引用したベルンライターの日記（1915年11月9日）でも指摘されている。
- (111) 注 75 を参照。
- (112) ベートマンもヤーゴーやリヒターも、結局のところオーストリアがポーランドを消化出来るかどうかに大きな不安を持つことにおいて共通していた事実は、本文中に訳出したベルンライターの日記の記述から明らかである。
- (113) Julius Graf Andrássy (1852-1924): 1906-1910 年 ハンガリー内相、1918 年 オーストリア・ハンガリー共通外相。
- (114) Otto Hoetzsch (1876-1946): 1913 年にベルリン大学員外教授、1920 年にベルリン大学東欧史講座正教授。ドイツ国会の下院議員でもあった。ソ連での評価が高く、のちに帝制ロシア外務省外交文書のドイツ語版の編集を委ねられた。
- (115) Ernst von Heidebrand und der Lasa (1852-1924): 1888 年以来プロイセン州議会のドイツ保守党所属議員、1903 年以降はドイツ国会議員を兼ねる。
- (116) Joseph Redlich, *Schicksalsjahre Österreichs*, Bd. II, S. 76, Anmerkung 57.
- (117) ベルンライターはこの手紙のあとにさらに次のようにつけ加えている。「私の手紙の最後の部分は、ドイツの国会議員フリードリッヒ・ナウマンがプラークに滞在してチェコ人と話し合い、ついでザルツブルクでの国会議員の会合ではオーストリアの国会議員にチェコ人と和解するように説得したことに関係しています。」Tagebuch Baernreithers, Bd. 15, S. 80. ナウマンのプラーク訪問については、ナウマンの主催する機関誌「ヒルフェ」に記事が出ている。*Die Hilfe*, Jahrgang 1915, Nr. 44. ちなみに、Henry Cord Meyer, op. cit., p.180, p.184. には、この手紙の最初と最後の部分が英訳されている。

- (118) オーストリアの普通選挙権確立に至る複雑な過程については以下を参照
Hugo Hantsch, *Die Geschichte Österreichs*, 2. Band, 3., durchgesehene und ergänzte Auflage (Graz/Wien/Köln: Verlag Styria, 1962), S. 462-468. 矢田俊隆『ハプスブルク帝国史研究：中欧多民族国家の解体過程』岩波書店, 1977年, 162頁。
- (119) Baernreither, Exposé S. 24f.
- (120) Jagow, Pièce jointe, Berlin, den 2. September 1915. *L'Allemagne et les Problèmes de la Paix pendant la première guerre mondiale*, Documents extraits des archives de l'Office allemand des Affaires étrangères, publiés et annotés par André Scherer et Jacques Grunewald, I. Des origines à la déclaration de la guerre sous-marines à outrance (août 1914 - 31 janvier 1917), (Paris: Presses universitaires de France, 1962), pp.177-179.
- (121) Memorandum du Gouvernement allemand, Jagow, Berlin, 13. November 1915, Promemoria, *L'Allemagne et les Problèmes de la Paix pendant la première guerre mondiale*, pp.211f.
- (122) Fischer, a. a. O., S. 257.
- (123) Jagow, Pièce jointe, *ibid.*, pp.212f.
- (124) Fischer, a. a. O., S.256.
- (125) *Inventare des Wiener Haus-, Hof- und Staatsarchivs* 7, S. 410f.
- (126) Gotthold Rohde, *Kleine Geschichte Polens* (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1965), S. 341.
- (127) 本稿は、以下の筆者の論文全五章のうち、第五章 (S. 385-398) を邦訳したものを基礎として、これにきわめて大幅な加筆を施したものである。Masaki Miyake, "J. M. Baernreither und 'Mitteleuropa': Eine Studie über den Nachlaß Baernreither", in: *Mitteilungen des Österreichischen Staatsarchivs*, Herausgegeben von der Generaldirektion, 17-18. Band, 1964-65, (Wien, 1965), S. 359-398.